



忠臣蔵：制約への挑戦

このエッセイの脱稿締切は6月末である。掲載されるのは10月号なので、最初に読んでいただけるようなコーナーではないことを考えると、私はこの文章を10月下旬の季節感で書かなくてはいけないことになる。広瀬香美の曲作りのような気分である。

依頼の際に「肩の凝らない文章を」とのお達しがあったが、実際のところ分析化学は基本的に肩が凝る。学問はだいたいそういうものではあるが、分析化学は「はかってなんぼ」などところがあるので一段と細かく、制約も多い。「小さなことは気にしない、大きなことは気にならない」がモットーの私には本来向かない分野である。

新たなものを産み出していくときに、このような制約を巧妙にすり抜けていくのは困難なことであるが、それはまた一種の快樂にもなる。私が分析化学に踏みとどまっている理由は、おそらくこの快樂追求にあるのだろう。もちろんこれは分析化学研究に限ったことではなく、悪事を含めた様々な分野に共通するものである。

あの自由奔放そうに見える芸術方面でも、創造の前に制約が立ちはだかることがしばしばある。典型的なものが、映画・舞台・ドラマなどにおける「原作」との葛藤である。こういった場合に、その制約のギリギリのところでもオリジナリティを築き上げるのは、狂気にも似た快樂があるように見受けられる。

制約が極限まで達していると思われる演目として、私の好きな「忠臣蔵」がある。ここで演じられる題材は、1701(元禄14)年2月のいわゆる「松の廊下刃傷事件」から翌年12月の「吉良邸襲撃事件」に至る一連の「元禄赤穂事件」であり、実はストーリー自体も“制約を克服する”話である。作品をプロデュースするという観点からこの忠臣蔵を見てみると、

- (1) 「元禄赤穂事件」自体は史実であるため、演出のためといえども、むやみにメインストーリーを変えることができない
- (2) 実際に討ち入りを行う大石内蔵助以下47人はもちろんのこと、敵役である吉良上野介やその周辺人物など登場人物が膨大であり、そのキャラもすでにかなりの部分が確立されている
- (3) サイドストーリー(史実ばかりではない)の多くがすでに定型化されており、ある程度の取舍選択はできても、これらを完全に無視することは許されない

といった、あまりにも巨大な壁に囲まれていることがわかる。(これが「水戸黄門」なら、とりあえず印籠を出して、由美かおるの入浴シーンさえ組み込めばあとは何とでもなる。)しかし、このようなオリジナリティ追求への困難さにもかかわらず、忠臣蔵という物語には

“勸善懲悪”、“忠義”、“筋を通す”といった、日本人の琴線に触れるような要素が数多く含まれることから、映画全盛期には毎年のようにオールスターキャスト(これがまた制約を増やす)の大作が上映され、また最近でも頻繁に連続テレビドラマや長時間ドラマが制作されている。(制作費がかかるのでオリジナルビデオは作りやすく、哀川翔は出演しにくい。ただし「なにわ忠臣蔵」というパロディ作品には出演している。)リメイクの量は尋常ではなく、冬の風物詩となっている。逆に「忠臣蔵」の定型的ストーリーがすべて史実としての元禄赤穂事件であると誤解されているくらいであり、本を買うときにも歴史か芝居かの内容確認を要する。

多くの作品がDVD化され、おまけにシーズンにはBSやCSで毎年のように旧作が放映されるため、各種「忠臣蔵」を見比べて制作側の技量を評価することが比較的容易にできる。ただし、作品自体はどれも長編で、しかも同じ話なので、見比べ作業はかなり大変である。個人的には、月並みではあるが長谷川一夫主演の1958年大映作品の構成が好みであり、サイドストーリーとしては「垣見五郎兵衛対決」(話自体は割とくだらない)がお気に入りである。果たして、この年末には新作が登場するであろうか? まあ、広瀬香美が主題歌ってことはないだろうが。

ところでこの「忠臣蔵」という題名は、1748(寛延元)年初演の人形浄瑠璃「仮名手本忠臣蔵」(後にこれが歌舞伎に発展)が由来である。この事件を演じることは、当時の幕府への反抗とみなされており、権力を背景とした“制約”が多くあった。最終的に、時代を南北朝まで約4世紀ずらし、登場人物の名前を変えたスタイルで勝負している。この浄瑠璃では大石内蔵助は「大星由良之助」というわざとらしい役名で描かれており、題名の「仮名手本」は討ち入り47人で行われたことを、「忠臣蔵」は大石内蔵助が忠臣であるということとそれぞれ暗喩しているという説が有力である。江戸時代の芸術家たちは、こういう反則ストレスの手を使っても、筋の通った表現を貫こうとしていたのだと感心させられる。勸善懲悪や忠義の対極にいる私ではあるが、分析化学研究にも人生にもこのくらいの気骨を持ちたいとは思っている。

次号は私の学生時代のバイト仲間である、大阪教育大学の久保埜公二先生に執筆をお願いしました。きっと私より面白い話を書いてくれるだろう(とプレッシャーをかけておこう)。

[金沢大学理工研究域物質化学系 平山直紀]